

長期間の低温と日照不足に関する営農技術対策について

平成25年4月30日  
北海道農政部

本日、札幌管区气象台から「長期間の低温と日照不足に関する北海道地方気象情報」が出されました。

4月16日頃から、平年より気温が低く日照時間の少ない状態となっており、今後1週間程度は持続する見込みです。

つきましては、今後の気象情報に十分注意し、次の技術対策を参考に状況に応じた適切な対応に努めてください。

## 第1 水稲

### 1 育苗中の保温対策

- (1) 育苗期間中に極端な低温や降霜が予想される場合は、ハウス等の保温管理を徹底し、保温資材や加温器具等で保温に努める。
- (2) 二重トンネルで被覆することが最も有効であるが、設置できない場合は、各種保温資材のベタがけや加温器具等で保温する。ただし、苗床の過湿には十分注意し、気温の上昇時には早急に保温資材を除去する。
- (3) 苗に降霜があった場合は、日の出前に被覆資材を掛けゆっくり溶かすか、散水することで被害を軽減する。

### 2 病虫害対策

低温・日照不足で苗の生育が緩慢な時は、苗立枯病が発生しやすい。育苗ハウスの温度管理に十分注意し、極端な低温(10℃以下)や高温(32℃以上)、過かん水を避けるなど、耕種的防除対策を徹底する。

## 第2 畑作物

### 1 ばれいしょ

#### (1) 植え付け作業

ア 植え付けが遅れても施肥量を増やさない。

イ 深植えは萌芽遅れや黒あざ病の発生を助長するので、適正な植え付け深度(3～5cm)に留意する。

ウ 植え付けが遅れた種いもは、芽の伸長を抑えるため、ハウスの換気を行い、種いもに光が十分に当たるよう配慮する。

#### (2) 植え付け後におけるほ場管理

ほ場の排水促進と地温上昇のため、ほ場が乾きしだい、中耕(畦間サブソイラ等)を行う。

## 2 てんさい

### (1) 移植遅れに伴う育苗管理

- ア ほ場での作業が可能となりしだい移植する。
- イ 移植が遅れても、施肥量を増やさない。
- ウ 移植の遅れにより苗が徒長しないよう、かん水を控え、なるべく外気に馴らす。
- エ 葉の黄化などの窒素欠乏症状が見られたら、ビート育苗用液肥を散布する。

### (2) 移植後におけるほ場管理

- ア ほ場の排水促進と地温上昇のため、ほ場が乾きしだい、中耕（畦間サブソイラ等）を実施する。
- イ 移植後、葉の黄化が見られるほ場は、天候が回復すると肥料を吸収し、葉色が回復するので追肥は行わない。
- ウ 移植した苗が低温・降霜などで障害を受けた個体はできるだけ早く補植作業を行う。
- エ 障害を受けた苗は斑点細菌病の発生に留意し、適期防除に努める。

## 第3 野菜

### 1 施設野菜

- (1) 作物の生育適温を下回る気温で経過する場合、肩換気の調節により、保温に努め、夕方は早めに閉めて夜温を確保する。
- (2) 気温が低下した夕方や早朝は、ハウス内にモヤが発生する場合がある。灰色かび病や菌核病、べと病等の発生が多くなるので、一度モヤ抜き換気を行うなど湿度が高まらない管理を行う。
- (3) かん水は少量多回数とし、地温の確保に努める。
- (4) きゅうり、ピーマンなど果菜類で肥大の遅れが生じた場合は、摘果を行い肥大の促進と樹勢の維持に努める。

### 2 トンネル・露地野菜

- (1) にんじん、だいこん、ごぼう等の根菜類は、は種に当たってはほ場の土壌水分に注意する。砕土が不十分な状態で、は種を行うと発芽不良や発芽後の生育に支障をきたすことがあるので、無理には種をせず、状況によって、は種計画の見直しをする。
- (2) 移植作業が遅れている野菜は適温域の範囲内で、育苗ハウスの温度を下げて苗の徒長を防止する。また、かん水は少量多回数とする。なお、低温や、萎れや葉の退色を伴う極端な水切りは苗の老化を助長するので注意する。
- (3) 苗が黄化してきた場合は、液肥による葉面散布や追肥を行う。
- (4) メロン、すいか、かぼちゃは、人工交配により着果の確保に努め、着果がばらついた場合は、着果棒立てを励行し、着果時期を確認して、適期収穫による品質維持と出荷計画の修正等に活用する。
- (5) 移植後、降雨によりクラストが発生した場合は、中耕を実施して生育の促進を図る。
- (6) 日照不足や多湿により発生しやすい病害の発生動向に注意して適正な防除に努める。

#### 第4 花き

- 1 定植予定の花き類は、早めにほ場（ベット）造成を行い地温を十分に確保する。また、品目によってはマルチ資材やべたがけ資材等を活用し、計画的な作付・出荷に努める。
- 2 低温性花き類は、日照不足をとまなう場合は、生育ステージや出荷目標期にあわせた温度管理や受光環境の改善に努める。
- 3 施設栽培の花きは夜間の保温に努め、計画的な生育・開花を促すが、過度な保温や被覆は軟弱徒長な生育となり品質低下を招くので、施設内の空気循環や天候に応じた日中の換気を行う。
- 4 曇雨天時の無理な摘心、整枝等の作業は病害の発生につながるので控える。また、低温日照不足時の多湿環境は軟弱化とともに病害（灰色かび病、細菌性病害）を招きやすいので注意する。老化花や切り残しも病害の発生源になるので放置しない。
- 5 開花期が近い花き類は、出蕾期から採花前は土壤水分を控え、硬い茎質にする。

#### 第5 畜産

- 1 放牧馴致で入牧ストレスを軽減
  - (1) 放牧予定にあわせ、濃厚飼料を徐々に減らし、良質な粗飼料を給与する。
  - (2) 寒暖差が大きくなるので、畜舎とパドックを自由に出入りができる状態にし、徐々に環境に慣らしていく。
  - (3) 育成牛は群単位で管理し、集団行動への適応能力を養う。
- 2 とうもろこし(サイレージ用)のは種
  - (1) 低温で経過しているので、平均気温10℃、平均地温8℃を目安に行う。
  - (2) 晩霜に備え、覆土の厚さを3cm程度確保する。

お問い合わせ先：生産振興局技術普及課(電話 011-231-4111 内線27-823)